すみだ地域学情報 We!

第9号
2009年
（平成21年）
8月発行

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい 活力 ゆとり
すみだ

すみだの風景 隅田川に架かる橋①

墨田区のシンボルである隅田川は区の歴史や文化に大きな影響を与え、そこに架かる橋も人々の生活や産業の発展に寄与してきました。

また、江戸時代の本所開拓の際に掘られた掘割として大横川（現在は親水公園）、横十間川、竪川、北十間川、さらには曳舟川などのように今は埋め立てられてしまった川もあり、墨田区は水のまちとも言えましょう。

今後は平成24年春に予定されている新タワーのオープンに向けて、北十間川を中心に、水辺空間を整備し、活気あふれるまちづくりと観光への活用を進めていくこととなっています。

■両国橋（長さ164．5メートル、幅24メートル）

江戸城防衛を第一とし、隅田川に橋を架けようとしなかった幕府は、千住大橋に次いで、明暦の大火を機会に、両国橋を万治2（1659）年に架橋し、本所の市街地開拓を急速に進めました。初めは大橋、後に武蔵と下総の両国に架かる橋という意味から両国橋と呼ばれました。

江戸時代には両国橋の東西の袂は大衆的な盛り場として栄えています。西側は大衆演劇、軽業、落語、娘義太夫などが盛んでした。また、東側の墨田区側は、向う両国と言われ、見世物が軒を並べ、野天の食べ物屋も多く、そうした中で江戸前寿司の元祖与兵衛寿司が生まれ、坊主軍鶏（しゃも）や、豊田屋などの獣肉（もものじゃ）店を始め、焼芋屋の芋金などが、江戸名物となりました。

毎年6月には橋の袂で水垢離（みずごり）を取り、白い着物を身につけて、六根清浄（ろっこんしょうじょう）を唱えながらお山に向う大山詣りの人たちでも賑わいました。

現在の橋は、昭和7（1932）年10月に、最初の架橋地点よりも100mほど上流に架け変えられ、今の姿になりました。

■蔵前橋（長さ173．4メートル、幅22メートル）

蔵前橋は大正大震災後の復興計画で、大正13（1924）年9月に着工、昭和2（1927）年11月に完成しました。

ところが、橋の周囲の街路敷地ができないため、3年も遅れて昭和5年3月まで使用が保留されました。たまたま昭和5年3月24日、東京市の復興状況をご覧のため巡幸された天皇が震災記念堂（現　東京都慰霊堂）にお立ち寄りになり、お帰りに蔵前橋の渡り初めをされることになったのです。

橋の名の由来は、江戸幕府の米蔵が台東区側の川沿いにあったところから、このあたりの町名が蔵前となり、それを受けて橋の名も蔵前橋となりました。

■厩橋（長さ151．4メートル、幅24メートル）

厩橋は明治7（1874）年に有料橋として民間工事により架設されましたが、赤字続きで地元でもてあまし、東京府に寄附されました。

明治22（1889）年と26年に架けかえられ、34（1901）年には鉄橋となりましたが、橋床が板張りだったため、大正大震災で焼けて使えなくなり、昭和4（1929）年9月に現在の橋が完成しました。

厩橋の台東区側には江戸時代に幕府の厩舎があり、このあたりは、明治初年まで「御厩（おんまや）の渡し」と呼ばれる渡船場で、それが橋の名となりました。

参考「橋はかたる」
（墨田区教育委員会
昭和58年3月）

写真・上　両国橋、中　蔵前橋、下　厩橋